

# 古の約束

書架の山に埋もれる者 一雪華一

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

愛と言う名のお呪い。禁忌の恋。遙か昔に交わした、古の約束。

目次

## 古の約束

空より、星が降った日。

幾数本の流星たちが、漆黒のキャンパスに赫い線を描く。

幻想のような光景。

誰もが目を奪われた。

心を奪われ立ち尽くした。

そして、いのちを奪われた。

それは永く、一瞬の出来事だった。

栄華を極めていたはずの、大陸でも指折りの緑豊かな大都市。

次の朝日を拝む頃には、その地に色は無かった。

◆◆

ざくり、と。

干からびた老骨の楔が、砂の雪原に足跡を刻む。

照りつける灼熱の太陽。皮袋の中の飲水はとうに無く、キリキリと

痛む喉は、迅速な休養を訴えかけていた。

遙か天空で、ガブラスの群れが鳴いている。

老骨が背負う、錆びてなお覇気を放つ刃を恐れてか、牙を持つ天使

はその瞳を老骨に向けるのみ。

頭上に死神の鎌を携えながらも、老骨は、楔を打ち続けた。

今にも折れそうな老骨に鞭打ち、楔を打つ由は唯ひとつ。

全ては、故郷に残した想い人に逢う為に。

待っている、言ってくれた。

信じていると、言ってくれた。

愛していると、言ってくれた。

もう一度この手を握り、名を呼んで貰うために。

もう一度あの小さな背を抱き、名を呼ぶために。

もう一度。

もう一度。

もう、一度。

その為に還るのだ。

故郷へ。貴女の元へ。

たとえ、この身が朽ち果てようとも。

◆◆  
どれ程、楔を打ち続けただろう。

一向に故郷は見えない。

—まさか。

老骨に一抹の懸念が過ぎる。気づけば踵を返し、走り出していた。そして、辿り着く。

砂に埋もれながらも、道を示すようにその頭角を出す、地下へと続く路を。

躯体が、脳が、魂が震えた。

そして聞いた。

『□□□□』

老骨の名を呼ぶ、想い人の声を。

「ーッ」

転げるように路を下った。

心臓が早鐘のように鳴っている。

ああ。アア。嗚呼。

—そこに、いるのか。

「■■■■ツ！」

◆◆

この建物には見覚えがある。

ここも。ここも。

通りで、いくら捜し求めても見つからなかったわけだ。

何もかも、砂に埋まり覆い隠されていたのだから。

とうに限界を迎えた楔を引き摺りながら、老骨は記憶の地図を頼りに進む。

「■■■■」

その角を左に曲がれば。

辿り着く。かつての住処に。

「■■■■」

『□□□□』

また、聞こえた。間違いない。

「■■■■ツ！」

——いるんだな。そこに。

朽ちた扉を楔で穿つと、老骨は奥へと進む。

そして、見た。

壁面に遺された、想い人からの手記を。

「■■■■……」

——赫い星が降り注ぎ、一族はこの地を離れた。私も故郷を離れるが、いつか再び貴方に、■■■■に逢えると信じているから——

涙が、溢れた。

「■■■■、■■■■、■■■■、■■■■、■■■■、■■■■ツ！」

何度も彼女の名前を呼ぶ。

何度も何度も。

何度も。

喉が灼けても。

血を吐こうとも。

声が、掻き切れても。

「■■■■ ツ!!!」

老骨の魂の咆哮は風となって、廃墟を抜けて虚空へ散った。

◆◆

老骨は再び長い旅路へと歩を進め始めた。

愛するものとの己の運命がまだあると信じて。

決して歩みを止めないことを誓いながら。

もう一度、君に逢うために。

To be continued……? ?